

新しい政界地図をどう読むか

ハンガリーの総選挙は予想通り FIDESZ の圧勝に終わった（本コラム執筆時点で FIDESZ の三分の二の議席確保は確定していない）が、体制転換 20 年を経過して、ハンガリーの政界地図は大きく塗り替えられることになった。この変化はハンガリーにとってどのような意味を持っているのだろうか。

ジュルチャーニィと心中した社会党

2006 年総選挙における社会党の勝利は、あきらかに救世主ジュルチャーニィの登場によるものだった。旧体制のエリートの古顔が幹部会を占める社会党は長らくオルバンに対抗できる若手政治家の台頭を待望していた。人気凋落で負けが濃厚だった社会党が前回選挙で辛勝したのは、オルバンとの党首討論で見せつけたジュルチャーニィの弁舌のうまさと同様、新顔としての新鮮さだった。しかし、選挙勝利から事態が急展開した。

社会党トップに立ったジュルチャーニィは党内掌握に自信を深め、旧幹部を見下した態度をとるようになった。それが裏目に出たのが、社会党内部のセミナーにおける「嘘のつきっぱなしだった」という発言である。緊縮政策の必要性を訴えるために誇張した表現を使ったのだが、ジュルチャーニィは一貫して同僚政治家を見下した態度で演説を行い、「それが分からない者は馬鹿だ」と言わんばかりの長時間の演説を行った。そして、この「嘘のつきっぱなしだった」というフレーズだけが、数ヵ月後の地方選直前にテレビやラジオで繰り返し放映され、騒乱状況を作ったことは記憶に新しい。この騒乱事件から社会党の人気は下り坂に入った。この演説の録音テープを外部に漏洩した人物は特定されていないが、ジュルチャーニィ失脚を狙った社会党内部の画策だったというシナリオが有力だ。

社会党の悲劇はジュルチャーニィに対抗しうる有能な政治家を欠いたことである。ジュルチャーニィの傲慢な態度にたいして、誰一人異論を唱えたり、対抗したりするものがいなかった。ジュルチャーニィがいなければ政権を維持できなかったという負い目が、社会党幹部に沈黙を余儀なくさせたのである。

ジュルチャーニィの弁舌には定評があるが、ジュルチャーニィ支配の実際の力は、体制転換のどさくさで蓄財した財力と KISZ（旧社会主義労働者党青年組織）の人脈である。カネと人脈によって、社会党はジュルチャーニィ独裁体制に再編成されてしまった。とくに KISZ 人脈による各種のマヌーヴァー的手法は、財政赤字数値の隠ぺい、頓挫した政府新庁舎の建設プラン、MDF「盗聴事件」のでっち上げ（いわゆる UD 事件）、反ファシズム抗議行動、旧 KISZ 幹部が関与する国内ワクチン納入、資産のタックスヘイヴン地での所有等々のいたるところで感知されることになり、次第に支持基盤を失うことになった。そうした危機が実感されたにもかかわらず、ジュルチャーニィに代わる政治家がいなかったことが社会党の凋落を招いたと言える。まさに社会党はジュルチャーニィのお陰で政権を維持し、

ジュルチャーニィの所為で凋落する道を辿ったのである。

そして、この社会党の凋落に最後の一撃を加えたのが、国会議員や自治体首長による公金横領の暴露である。ただの権力亡者でしかなかったという事実、旧来の社会党支持者のほぼ半数が社会党を見限った。社会党の大票田ブダペストで、社会党はほぼ全議席を失うことになった（32 選挙区のうち、第 2 回投票で当選の可能性があるのは、第 20 区のトート・ヨーゼフのみである）。まさに歴史的惨敗である。

社会党再生の道は見えない。日本の自民党を同じように、国会議席を得たのは比例区で当選した幹部連中である。国会議席の七分の一程度を占める小政党として、どのような政党に生まれ変わることができるのだろうか。前途は厳しい。体制転換 20 年の節目を迎え、ハンガリーは新たな政治の時代に入ったと言える。

ネオリベリズム (SZDSZ) の敗北

体制転換で誕生した二つの政党が、今次の選挙によって政治の舞台から消滅した。そのうちの一つ、SZDSZ (自由民主連合) は旧体制時代の反体制派活動家を中心としたユダヤ系の政党であり、アメリカのユダヤ人団体の支援を受け、首都ブダペストを中心に学歴の高い支持層を基盤に活動してきた党である。支持者や政治家に多くの進歩的知識人を抱え、ブダペスト市長デムスキーを擁して体制転換から現在に至るまで、首都の政治を牛耳ってきた。

本コラムでも指摘したように、戦後のハンガリー共産党にはユダヤ系の指導者が重要なポストを占めていただけでなく、旧体制の反対派を主導してきたのもユダヤ系の知識人だった。このような事情が SZDSZ の指導者間の関係に微妙な影を投げかけた。SZDSZ の政治家の中には反体制派の活動家出身でありながら、その両親が秘密警察や政府・党の中核ポストを占めていた人物が少なくない。体制転換が一段落し、FIDESZ が 1998 年に政権をとってから、ハンガリー公安警察の取調官や諜報部員のデータが開示されるようになり、SZDSZ の中に旧体制の加害者と被害者の家族が共存していることが明らかになったのである。この矛盾が SZDSZ 政治家の結束を崩すことになった。

さらに SZDSZ の政治家には自らの理論的主張を強引に押しつけるアロガントな行動が多く、それが「ユダヤ人優越 (エリート) 主義」の誇示と受け取られ、社会党政治家との確執を生んできた。実際、長年続いた社会党との連立政権において、各種政策の理論的裏付けを行ってきたのは SZDSZ である。5%程度の支持率しかない SZDSZ が強引に自らの主張を政府の政策として実現することにたいし、政界のみならず、SZDSZ の主張に同調できない知識人からも反発の声が増えていた。とくに、医療改革における複数保険制度 (事実上の健康保険の民営化) の実行を主張して、市場原理にもとづく医療保険制度の推進を図ろうとしたことが、連立政権内に大きな軋轢を生み、事実上その賛否が国民投票で否決されるという決定的な政治的敗北をもたらしたのである。

こうして、アメリカ型資本主義の導入を主張するネオリベリズムにもとづく医療改革

の推進で、SZDSZ は墓穴を掘ることになった。2008 年 3 月の国民投票における社会党—SZDSZ の敗北は、政権の正当性そのものを揺るがす事態になった。この政策的失敗によって SZDSZ は政権を離れたが、内部抗争と分裂を繰り返して政党そのものが自己崩壊するにいたった。社会党と同様に、SZDSZ 消滅の最後の一撃は、ブダペスト市における BKV（交通公社）のスキャンダルによってもたらされた。

20 年近くにわたるデムスキー市長時代の社会党—SZDSZ による首都支配によって、BKV が両党政治家の食い物にされてきた事実が暴露された。高い人気を誇ってきたデムスキーの政治的倫理的評価が地に落ちてしまった。BKV からの資金流出（公金横領）にたいして、市長として何の管理能力も発揮できなかったばかり、側近中の側近がこの腐敗に深くかかわっていたことが暴露された。まさに最大の支持基盤であるブダペスト市における与党社会党と SZDSZ の権力汚職は、これら両党の支持基盤の壊滅的な喪失を結果し、SZDSZ は選挙に参加することすらできなかつたのである。反体制知識人の党として出発した SZDSZ はその役割を終え、政治の舞台から姿を消した。

MDF 消滅の事情

体制転換後の最初の自由選挙で勝利し、アンタル・ヨーージェフ率いる政府を樹立した MDF は、今回の選挙では 3% に満たない得票率で議席を獲得できなかった。FIDESZ との共闘を拒否し、社会党政権と良好な関係を保つことで党内を掌握してきたダーヴィッド・イボヤは即日党首辞任を発表し、ここに 20 年の MDF の歴史が事実上、閉じられた。

MDF はもともと文化人が中心になった構成した政党で、民族的な伝統や農村文化を守る党として出発したが、FIDESZ の躍進とともに二大政党の狭間に落ち込み、独自性を発揮することができなかつた。さらに、党の主導権をめぐる争いから分裂が繰り返され、前政権末期には国会会派を構成する国会議員定数を割る事態になった。有力政治家が FIDESZ に移る中、MDF は次第にダーヴィッド党首の個人党の色彩を帯びることになり、今次の選挙では当初から苦戦が予想された。

ダーヴィッド党首は MDF の苦境を一挙に解決する方法として、SZDSZ に近い経済学者のボクロシュ・ライヨシュを比例区のトップに立て、都市部の知識人の支持を獲得しようと考えた。さらに、崩壊した SZDSZ から何人かの候補者を MDF 候補者として受入れ（SZDSZ 側からの資金提供の見返りに）、他方でジュルチャーニイの「伝記」作者で知られる政治学者デブレツェニイ・ヨーージェフをも比例区候補者として受入れ（ジュルチャーニイから資金提供があったと噂されている）、形振り構わずに議席獲得を目指した。

しかし、このダーヴィッドの目論見は見事に外れてしまった。旧来の MDF 支持者はもう MDF はなくなつたと支持を止め、他方で「隠れ SZDSZ—ジュルチャーニイ」を見透かした市民は MDF を見離したのである。ボクロシュは MDF の欧州議員で、MDF 自体がすぐに消滅するわけではないが、組織政党として MDF を再生することはほぼ不可能になった。

LMPの裏舞台

社会党でも FIDESZ でもない「別の政策の可能性」(オールタナティブ)を党名に冠した LMP が、政党投票で 7%を超える票を得て、初めて国会議席を獲得した。候補者のほとんどは 30 歳代から 40 歳代のインテリである。社会党や SZDSZ に近い政策を掲げているが、既存の政党との関係を意識的に薄めて、環境政策などを大きく党の政策に掲げている。

社会党や SZDSZ を支持してきた有権者の多くが、旧来の支持政党に代わるものとして、この新党 LMP に投票したと考えられる。もっとも、LMP 代表を務めている 9 名の多くは SZDSZ の黨員だったようだし、コーカ・ヤーノシュ(元 SZDSZ 党首)が LMP の候補者擁立の署名獲得に力を入れていたことが報道されている。SZDSZ の旧政治家はいないが、SZDSZ 系の新組織だと言えなくもない。既存政党との違いは、このグループはまだ身辺が綺麗だということだ。

LMP の事実上の代表を務めているシッファー・アンドラーシュ自身は名を知られる存在ではないが、シッファー家そのものは戦後のハンガリー史に残る家系である。アンドラーシュの祖父シッファー・パールは戦前からの社会民主党の活動で、戦後のハンガリー人民共和国最高幹部会議長に就任したサカシッチ・アルパードの女婿である。だから、サカシッチはアンドラーシュの曾祖父にあたる。

サカシッチは社会民主党出身であり、シッファー・パールも社共共同に熱心でなかったことから、ラーコシの粛清の標的になり、1950 年に逮捕・監禁された。ラーコシの失脚とともに彼らは名誉回復され、パールはカーダール政権で要職を歴任してきた。このパールの息子の 1 人がアンドラーシュの父シッファー・ピーテルである。ピーテルは ELTE で歴史学・民俗学を専攻した歴史家である。

ところが、このシッファー・ピーテルの人事を巡って、前政権時代にひと騒動があった。それもこれも、ジュルチャーニイが歴史家のピーテルを金融監督庁(PSZAF)の局次長に任命したことからはじまった。このポストは高給が保証されているが、EU の規定によって「局次長より上のポストには金融関係の専門高等教育を終えた者だけが就任できる」。金融の専門家でもないピーテルにポストを与えるために、当時のジュルチャーニイ政府は 2005 年の予算法案の附則に「それに匹敵する実務経験」という項目を入れて、ピーテルの就任を助けたのである。これがいわゆる「Lex Schiffer」法と揶揄される改正である。この部分は 2005 年の憲法裁判所の判断によって無効とされたが、ピーテルはその職にとどまった。憲法裁判所は法律不測の条文のみの憲法違反を認定したが、特定人物の可否についての認定を行わなかったのである。

ピーテルは息子の選挙に影響があると考えたのか、今年初めに PSZAF を退職し、年金生活に入ることを決断した。もちろん、それなりの退職金が支払われた(実際の退職年月日は 8 月 15 日で、それまで給与も支払われる)。ちなみに、ピーテルの弟ヤーノシュは体制転換以降、社会党の国会議員である。ジュルチャーニイがシッファー・ヤーノシュの頼みを受けて、ヤーノシュの兄ピーテルに職を与えたのが真相である。シッファー・ヤーノシ

ユの議員履歴書を見ると、祖父サカシッチや父シッファー・パールの履歴が詳しく書かれている。社会民主主義の伝統を受け継ぐという血統の良さを誇示したようにも読める。LMPの顔であるシッファー・アンドラーシュはこのような家系に生まれ育った人物である。LMPはその誕生からして、社会党や SZDSZ と無関係ではない。

JOBBIK をどう見るか

国外のメディアは JOBBIK の躍進を極右の台頭と騒いでいるが、これだけ権力の腐敗が暴露され、他方で政財界のエリートたちが資産を国外に保有していることにたいし、ハンガリー国民が暴動を起こさない方が不思議だと言っても良い。その歪んだ現れが反ユダヤ主義反ロマ主義を掲げる JOBBIK の躍進である。

JOBBIK の支持地域ははっきりしていて、東ハンガリー（とくに北東ハンガリー）である。この地域はこれまで社会党の地盤だったところである。この地域で軒並み、JOBBIK は第二党の得票を獲得した。言うまでもなく、この地域は経済的に遅れた地方で、多国籍企業の進出も少なく、体制転換による市場化の恩恵をほとんど受けていない地域である。メディアは体制転換の敗者だというのが、勝ち負けを言う前に、ここはまだ旧体制が崩壊した状態が手つかずのまま放置されている地域だと言ってよい。

先月号で指摘したように、ハンガリーの経済構造は二重になっており、多国籍企業に関連する周辺市場経済と、それ以外の国内市場が分離されている。後者の市場は規模も発展速度も遅く、東へ行けばいくほど、旧体制の廃墟が残っているだけで、新しい市場経済要素の芽生えすら見えないのである。そういう絶望的な環境が激しい対外排外主義を生む土壌になっている。その意味で、たんに思想を問題にするのではなく、この地域の生活環境を変える方策を問題にしなければならない。

LMP がいろいろな政治潮流の思惑や思想を背景にしているのと同様に、JOBBIK を構成する政治家やリーダーも一枚岩とは言い難い。激しい言動で知られる女性闘士モルヴァイ・クリスティーナの経歴も多彩である。夫君は MTV（ハンガリー国営 TV）の著名なコメディネーターで文化局長を務めているバロー・ジョルジュである。

モルヴァイ自身は反ユダヤでも反ロマでもなく、人権派の弁護士で裁判官資格をもっている。女性の権利、家庭内暴力防止の活動が主たる仕事の領域で、FIDESZ 政権時代に国連の CEDAW（女性差別撤廃委員会）委員として、2002-2006 年まで国連に努めた経歴がある。したがって、彼女自身は排外主義の立場をとるものではないが、ジュルチャーニイ政府が彼女の委員任期を延長更新しなかったことが、モルヴァイをいたく傷つけ政権批判に向けさせることになったと言われている。

もっとも、もう 1 人の JOBBIK 代表のヴォナ・ガーボルの方は根っからの民族主義者で、軍服で威嚇行進する Magyar Garda 代表である。比較的若い層にミリタントな排外主義が受け入れられている。JOBBIK が国会に議席を得てから、この組織がどのように変わるのかを注目しなければならない。法律で Magyar Garda の解散が命じられたが、ヴォナは

JOBBIK の議員は Magyar Garda の制服で登院すると発言している。

Magyar Garda を政治の表舞台へ引き出すことによって、不法な暴力への歯止めがかかるはずだ。逆に、一部の過激派は JOBBIK から飛び出して、不法な活動を続けようとするかもしれない。新国会は JOBBIK に振り回されることも予想されるが、新政権がハンガリー経済の発展と地域経済の振興に手を打ち、遅れた地域の再生に取り組むことが、過激派を鎮める方法だろう。もちろん、政治家や公営企業トップの腐敗を徹底排除することは前提である。

(関連する記事は、<http://www.morita.tateyama.hu> を参照されたい)